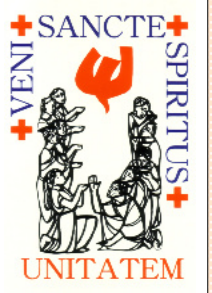


# カトリック 高松教区報

2023年3月12日 (第212号)  
発行所 カトリック高松司教区 広報委員会  
〒760-0074 高松市桜町1-8-9  
TEL 087-831-6659 FAX 087-833-1484  
Email  
教区:catholic-takamatsu@takamatsu.catholic.jp  
広報:tk-koho@mxi.netwave.or.jp  
生涯養成:yousei@takamatsu.catholic.jp  
WEB http://www.takamatsu.catholic.ne.jp/



マザー・テレサの言葉  
もし、わたしたちが互いに愛し合うなら、そして平和、喜び、主の現存を家々にもたらすなら、わたしたちは世の中のすべての悪に打ち勝つことができるのです。



徳島教会にて

## キリスト者の祈り 「祈りの持つ力」を知り、信じ、生きよう

カトリック高松司教区事務局長 小山 一 助祭

四旬節は、毎年同じように巡ってくるが、実際に同じだろうか？ 昨年の四旬節から、もう1年の歳月がたち、私も周りの世界も同じではなくなっている。教会は典礼暦という形で、私たちに「新たな歩みを始めるよう」呼びかけているように思われる。

四旬節には「祈りと犠牲」とほどこし(慈愛・連帯)が常に思い出される。これらはキリスト者に不可欠の属性であり四旬節に限ったことではないが、「犠牲とほどこし」は特に四旬節に意識されるのが現実だ。しかし、「祈り」の重要性・必要性はそれ以上の「根源的な重み」がある。

心のこもらぬ祈りもせざるを得ない(祈らないよりはましだろうと)のは我々の現実でもあるが、キリスト者に限らず全ての人間にとって「祈ることの重み」は変わらない。誰しも、この祈りだけは心を込め魂を込めてすべきという祈りがあり、また、すべき時がある。

私の恩師メキシコ師は「祈る時には、努力すれば実現できるような(ちっぽけな)祈りはしないで下さい。自分には不可能なことを願って祈りなさい。」と私たちに教えられた。神学生時代にハンガリー動乱の中を、命をかけて国境の森林をさまよひ亡命された師の言葉と表情には、言葉以上のものが伝わってきた。そして、振り返ってみて師の言葉は真実だと私も同意する。今、私たちはどれほど「祈りの持つ力」を知り、信じ、生きていくだろうか。河合雄雄さんの本を読んでいると、皮肉なことに、キリスト者より臨床心理士の方が祈りの力と可能性を知り信じているという概念で説明できてもできなくても、私たちの祈りには力があることは、気付いた人はみんな知っている。

残念ながら、事実として人間の力は平等ではないようだ。ある人には感じられることが、別の人には感じられない。ある人には聴こえ見えるものが、別の人には聴こえて来ないし見えない。個人差でなくチャンスの問題かもしれない。「すべてのことには時がある(コヘレト3・1)」のかも知れない。感じられる時と感ぜられない時、聴こえ見える時と聴こえず見えない時があるということかも知れない。



このたび、聖力タリナ大学および短期大学の学長を退任するにあたり、私の務めの期間に協力してくださったすべての方々に、挨拶と感謝の言葉を送りたいと思います。

### 四国の高等教育機関として ユニークなカトリック大学を目指した歩み

2000年に本学の学長として選出されましたが、私の勤めていた大学の都合によって2001年4月まで着任することが出来ませんでした。

着任以来、私は四国で唯一のカトリック高等教育機関として、カトリック教会の教えと聖ドミニコ修道会の精神に基づいたキリスト教的教育方針を維持するよう努めてきました。私の学

行事には出席して下さり、教職員と若い学生たちに貴重な話をしていただけでした。また溝部司教様は「キリスト教研究所」の客員所員としても協力していただきました。皆さんのご厚情に御礼を申し上げます。

2017年に短期大学部創立50周年、大学は創立30周年を記念しました。教育

められていたにしても)私を癒して下さるに違いない。」と感じることができた。ただ、イエスに近づき頼むような勇氣や氣力はとてもなかった。自分のできる精一杯として、人ごみに紛れてイエスの衣に触れた(神さま、私を憐れんで下さいと信じ願って)。イエスにとってすら、場違いで想定外の希望・信頼だったようだが(ルカ8・46)、イエスを遣わされた神はこの婦人の思いと信仰に目を留められた。私なら、狂信・妄信と退けてしまいたい。イエスの言葉を聴いた人は大勢いたが、彼女のようには聴こえな

かったし、見えなかった。故郷のカファルナウムでは逆だった。イエスさまはそこでは、何も奇跡を行うことができなかった(マルコ6・5)。奇跡を行おうとされなかったのではなく、奇跡を行うことができなかった。理由は、故郷の人が悪いとか変な人ではなく、常識に富む理性的な判断力を持つ人たちだったからである。あれは大工のヨセフとマリヤの子だと。私たちも同じではないだろうか！パウロが繰り返し警告したように、この世の常識や知恵は、たびたび、神のことはや業を見えず聞こえなくする。気付かぬ

ままに「恵みの時」を過ぎ越してしまう。天の国は力づくで襲われており、激しく襲う者がそれを奪い取ろうとしている(マタイ11・12)。祈りには力があり、それを知った人は持ち物全てを売ってでもそれを手に入れようとするのだろう。

(注)正確には「この世の知恵への「過度の捉われ」」だろう。これは宗教だけでなく自然科学においても同じで、科学研究者は自分が如何にだまされやすいかを経験している。

### はばたき

食品の値上がりに始まり、光熱費まで値上がりが続く、皆一様に、疲弊していきそうな昨今の現状に、気持ち暗く落ち込みそうになりますね。

そんな時でも、人は成長し、生きにくい社会に羽ばたこうとしている若者たちがいます。我が家の子供たちは、5人いますが、5番目の息子は今年の4月からは看護師として社会に巣立ちます。

コロナだとか、インフルエンザだとか毎日の様にニュースで情報が流れていますが、そんな厳しい中を医療現場に入るのは、家族も本人も一抹の不安があります。しかし、彼は2歳まで生きられないと言われていた子で、酸素をつけ、喀痰吸引を続け、10ccのミルクを1時間かけて飲み、その後噴水の様に吐き出してしまおうという日々の中、この子は神様から預かった大切な命。という強い気持ちを持ち、医療現場の方と手を携え、今日まで命を頂いたことに感謝し、医療の道を自ら選び、今羽ばたこうとしています。

そして、その母は、やっと子育てから解放され、もう手を挙げ、これからは、自由だ！と叫び出したくなるような気持ちです。

生まれた子の命を奪ったりするニュースを見聞きする度に、もっと命の大切さを小さい頃から学ばなくてはいけないのではないかと、警鐘を鳴らしたくなります。命はたった1つ。それを温かく包み込む優しさ、大らかさを世界中の一人ひとりにもってほしいと願ってやみません。

地区・ブロックの話題

丸亀教会納骨堂  
リフォーム工事終了

かねてより計画していた納骨堂のリフォームが終わりしました。(一期工事) 今回は永年収骨されていた遺骨が50

年以上経ち、遺骨を管理する遺族もなく放置状態になっていた納骨櫃を、合同収骨する場所を作り、そこへ収骨する事になりました。ここ数年



外国籍信者の方々も、将来ここに納骨がしたいと言う要望もあり、また、丸亀教会の信者や善通寺、観音寺教会の信者からも要請があり、納骨場

所が無くなっていった所だったので、ご遺骨を移動する事になりました。特に小豆島修道院、「マリアの園」、「マルチン病院の患者さん」、「特別養護老人ホーム聖マルチンの園」の方々が多く収骨されていま

す。ご遺族との連絡も出来ず、昔の知り合い、友人親戚の方でも高齢で教会にも来ていないため追跡調査が出来ず困っています。どうかお心当たりのある方は是非ご一報をお待ちしています。

連絡先カトリック丸亀教会納骨堂管理委員会 太田まで 090・3181・4006

教会の掃除を通して  
外国籍の若い力とともに

丸亀教会では、御聖堂、トイレ、廊下などの掃除を、婦人部を中心に順番を決めて行っています。最初は特に勤めに出ていない女性を中心でした。しかし、どこの世界も同じで、少子高齢化しつつある現状では上手くかみ合いません。

そんな中、数年前から月に一度の回数で、外国籍の信者さんが参加してくれて、ごミサの後、大勢の若者が一挙に掃除をしてくれているので大いに助かっています。

因みに丸亀教会の日本人信者は70歳代が大半です。若い力が丸亀教会を支えています。

阿部眞理ブラザー  
ありがとう！

徳島教会 山口文字

聖パウロ会員故阿部眞理ブラザーの『追悼ミサと偲ぶ集い』が去る2月11日に大阪修道院に隣接した姫里集会所で開催されました。

日本一小さな高松教区に寄り添い続けて下さったブラザーに感謝を伝えたく、また、皆さんとその思いを分かち合いたいと参加させて頂きました。

最後にお目にかかったのは、待降節に入った昨年11月27日に徳島教会への訪問販売(宣教)にいらっしゃった時です。すい臓がんという事で、ずいぶん痩せておられました。すがすがしい声は変わりましたが、穏やかな話しは変わらなかつた。高松教区の司教様、早く決まるといいね。などと自分の事はさておき、いつもの笑顔で話していました。この時には、もう効く抗がん剤がなくなつたとおっしゃっていましたから、体は随分と

きつかった事でしょう。しかしパウロのように強い信仰で、み言葉の分ち合いのLINEを毎日欠かさず送り続けて下さいました。「主が前に立ち、道を照らし、杖となり共に歩んでくださる。主が苦しき悲しみも癒し、恵みに変えてくださる。」この頃の分ち合いの一部抜粋です。2022年の待降節、降誕祭、年明けて主のご公現をイエス様と共に、最後の時を恵みの中で歩まれたのだと思います。

今、この文章を綴りながらも、こみ上げて来るものがあります。それは、悲しみの涙というよりも感動とか感謝の涙なのかなと感じます。1月16日の帰天の日、兄の光一ブラザーが詠んだ一句にその思いが表れているように思いますのでご紹介します。

「走るべき道 走り通して 今日新たな 復活の日」パウロ会員としてその生涯の最後まで力の限り宣教の旅を続けたその姿に、十字架を担い、何度も倒れながら、ゴルゴタへと歩み続けたイエス様の御姿を見るようです。『偲ぶ集い』で見せて頂いたアルバムに、帰天の朝に空港にかかった美しい虹の写実があり「眞理が天国に行ったし

るしか」とのご兄弟のコメントが記されていました。神様の粋な計らいですね。

1987年に箕面修道院に赴任されてから高松教区の『家庭と召命の日』から始まり『子ども&中高生の集い』『教区民の日』『ルルド祭』等々。そして忘れてならない徳島地区の『ファミリーキャンプ』です。協力して頂いた集いでの楽しい思い出は限りなくあります。いつもブラザーの周りには子どもたちが群れて、弾ける笑顔が溢れていました。トレードマークの笑顔に込められた召命への思いが、子どもたちの心の中からし種のように膨らみ大きく育つことを願ってやみません。

感謝 +

ヨセフ阿部眞理  
1958年10月18日生  
1971年3月30日  
聖パウロ修道会入会  
2023年1月16日帰天

◇教区スケジュール◇

- 3月  
5日(日) 四旬節第2主日  
10日(金) 性虐待被害者のための祈りと償いの日  
12日(日) 四旬節第3主日  
17日(金) 日本の信徒発見の聖母  
19日(日) 四旬節第4主日  
20日(月) 聖ヨセフ  
21日(火) 春分の日  
25日(土) 神のお告げ  
26日(日) 四旬節第5主日  
27日(月) 教区経済問題評議会  
29日(水) 教区責任役員会  
4月  
2日(日) 受難の主日(枝の主日)  
4日(火) 聖香油祝別ミサ  
6日(木) 聖木曜日(主の晩餐)  
7日(金) 聖金曜日(主の受難)  
8日(土) 聖土曜日  
9日(日) 復活の主日  
16日(日) 復活節第2主日(神のいつくしみの主日)  
23日(日) 復活節第3主日  
29日(土) 聖カタリナ(シエナ) おとめ教会博士  
昭和の日  
30日(日) 復活節第4主日



ブラザー阿部と山口さん

全国広報会議レポート

災害発生時の広報について

昨年11月の全国広報担当者会議で紹介された「ERST(緊急対応支援チーム: Emergency Response Support Team)と被災時の広報」について報告します。

ERSTは、災害発生時、被災教区が中心となった支援活動を円滑に行えるよう、災害対応が軌道に乗るまでの間、教区現地スタッフのサポートを行います。カトリック中央協議会(以下「中央協」)の復興支援室に属しています。

●ERSTメンバー

メンバーは7人で、東日本大震災など被災地での支援体制構築の経験者で構成され、被災教区での支援体制構築のため短期的(最長3か月)に投入されます。復興支援活動の主体は被災教区であり、ERSTはあくまで被災教区のサポートをします。

●広報の役割

災害が発生すると、全国の教会、メディア、ボランティア希望などの個人、中央協、既存の支援団体から、善意の問い合わせが殺到し、教区事務局は対応で大混乱します。

そこで外部の人が欲しい情報をいち早く流し、支援につなげることが広報担当者の重要な役割となります。それが教区の負担軽減につながります。

教区広報担当者に求められることは、次の4つです。

- ①情報の収集 ②情報の精査 ③情報の提供 ④関係各所への情報の共有

●ERSTの支援内容

大規模災害発生の場合、復興支援室が立ち上がり、ERSTが派遣されます。

ERSTは、教区の広報担当者と一緒に以下のことを行います。

- ・被災状況の整理・精査
- ・被災状況と支援の呼びかけ、日々の活動報告(教区ホームページ、SNSなど)

- ・支援に関する電話・メール対応など(教区に直接問い合わせがあった場合の対応)
- ・中央協復興支援室広報チームへの連絡と情報共有(主にERSTが実施)

中小規模災害発生の場合、復興支援室は立ち上がり、ERSTは派遣されません(被災教区からの要請によりERSTが派遣される場合もあり)。被災教区の広報担当者が、前記支援内容にある活動を行います。募金や支援活動を行う場合、募金方法やボランティア、物資の募集方法の決定も必要です。

●災害への備え

災害時における広報の役割はとて大きく、情報入手先リスト作成等の備えをし、どのように情報発信をするか、次のようなことを教区事務局内で話し合っておくことが非常に重要です。

- ・情報入手ルート(カリタスジャパン配布の「災害対応マニュアル」参照)
- ・外部(社会福祉協議会など)とのつながりがある信徒の把握(リスト作成)
- ・情報発信の方法確立(ホームページ、SNSの立ち上げ)

●フェイスブックなどSNSの活用

電話対応の数を減らすためにSNSを使うという発想で、印刷物を掲示した掲示場による情報発信とあわせて活用します。

SNSの利点=印刷物よりも即時性が高く、物資の供給など日常的なことや被災地の状況を手軽に発信し続けることができます。SNSの中ではフェイスブックが向いています(高齢者・外国人が使っている。投稿文字数が多い。)

発信内容はどんどん更新していくことが重要で、申し出が多い物資支援の需要と供給を合わせるマッチングサイトのようなものも有効です。

※ 中央協では、今後、各管区に災害対策チームの設置を呼びかけるとのことです。